

エッセイ

「生きること」は「愛すること」！？

- 日本の合唱界におけるドイツ語の発音の慣習 -

久保さやか

知り合いのドイツ語の先生がこんな話をしてくれた。ある民間の合唱団がドイツ語を歌うので、ドイツ語の発音指導に行ったとき、団員が歌詞の中の“leben” [le:bən]「生きる」という単語を「リーベン」と発音するので、“lieben” [li:bən]「愛する」と区別がつかなくなってしまっていておかしかった、と。

私も一般のアマチュア合唱団に所属していて、ドイツ語専攻の学生としてドイツ語の歌を歌う際にはなにかと頼りにされているものの、どうしても立ち入ってはならないような、合唱界のドイツ語発音の伝統というか、長い年月をかけて出来上がってしまった慣習に突き当たることがある。もちろん、歌う以上は発声に適した特別な調音の仕方があるべきだが、ドイツ語既習者から見て腑に落ちない「ルール」がいくつもあるのだ。

その中で最も複雑な事情にあるのが、冒頭で述べた、このドイツ語の長母音/e:/の扱い。この音は単なる長母音の「エー」ではなくて頬の下のほうの筋肉を使って発音する緊張母音である。その際舌根にも力が入って、それが若干前方に出るため、聴覚的には/i:/に近い響きを持つ。そのためこのような緊張母音を音素体系に持たない日本語話者がこの音を、文字によらず、聞いてそれを忠実に再現しようとする、「イ」と「エ」の中間音を出そうと苦心する。その際、/i:/の状態から若干唇を丸め、舌をやや下げた不自然な音を出してしまう人が多い。また極端な場合は完全に「イー」に一致させて発音してしまう。「イ」と「エ」

Cercle linguistique de Waseda (ed.)

Travaux du Cercle linguistique de Waseda. Vol. 9., 2005. 59—61.

の中間音という捉え方は/i: /の「イー」との区別を意識した、わりと最近の傾向でアマチュアに多いと思われる。一方、ドイツ語初心者のためのカナ表記には、中間音では表記しにくいためか、「イー」または綴りどおりの「エー」が当てはめられている。例えば、有名な『第九』の歌詞の一節：

Küsse gab sie uns und Reben, einen Freund, geprüft im Tod;

Wollust ward dem Wurm gegeben und der Cherub steht vor Gott.

これを高校生のときに、“Reben” [re:bən]と“gegeben” [gəge:bən]、“steht” [ʃte:t]をそれぞれ「リーベン」_レ、「ゲギーベン」_レ、「シュティートウ」と発音するように指導された記憶がある。そのくせ“Cherub” [çe:rʊp]は「ケールプ」という発音だった。

しかし、この緊張母音[e:]がもたらす混乱は発音の仕方の問題にとどまらない。ドイツ語の“der” [der]、“dem” [dem]、“den” [den]は、定冠詞である場合と、関係代名詞、指示代名詞である場合があるが、韻律ではたいてい定冠詞は弱音部、関係代名詞と指示代名詞は強音部となる。さらに指示代名詞はそれぞれ[de:r]、[de:m]、[de:n]と母音が長くなる。このようにさまざまな姿を持ちうる語であるが、合唱においては、これらは一律に[de:r]、[de:m]、[de:n]、つまり定冠詞であっても関係代名詞であっても「ディール」や「ディーム」_レ、「ディーン」_レ、またはいわゆる「イ」と「エ」の中間音でもって発音される傾向にある。確かに、歌である以上、定冠詞と関係代名詞にも四分音符だの八分音符だのが割り当てられて、少なくとも普通の発話時よりも長めに発音されるのだから、結局は長母音[e:]を持つということになってしまうのであるが、実際にドイツ人歌手の歌の発音を聞いてみても、全ての“der”、“dem”、“den”が押し並べて緊張母音[e:]で発音されているようには聞こえない。特に定冠詞である“der”、“dem”、“den”は、確かに開いた[ɛ:]の発音ではないけれども、“leben” [le:bən]や“Reben” [re:bən]にあるような緊張母音[e:]と同質のものとは思えない。

そうではあっても日本の合唱のしきたりとして割り切ってしまうばよい。何も抗うことはない。しかし、ただ、律儀に頬の緊張を使って[de:r]、[de:m]、[de:n]と発音しようとする、強音部に挟まれた弱音

部の定冠詞は歌いにくい。それに定冠詞はやはりそれがかかる名詞に対して後接的であることが曲のリズムにも反映されていて、たいてい相対的に短い長さの音符が付されているので、頬を引っ張っている余裕はあまりない。かといって頬や舌根の緊張を伴わない、あの「イ」と「エ」の中間音には抵抗を感じる。いや、それ以前にあの微妙な発音を作るのは、実はかえって難しい。そんな苦勞をするくらいなら頬の筋肉を、張らせたり緩ませたり頬が痛くなるくらいよく使って、“lebendig”「生き生きと」かつ“lieblich”「魅力的に」に歌いたいものである。

(くぼ さやか)

KUBO, Sayaka. „Leben“ ist „lieben“!? Traditionen der Aussprache im japanischen Chor.